

## 石橋湛山の自由主義・個人主義（金融学会ホームページ用）

寺西重郎（日本大学）

2012年5月

（1）戦前を代表するリベラリストといわれる石橋湛山はJ. S. ミルの影響を強く受けたといわれるが、そのリベラリズムはミルのものとはかなり異質であり、そこに我々は日本の経済社会の歴史を背景にした思想的展開の特質をみることができる。

（2）まずJ. S. ミルの自由論（1860）の内容は多面的でありその性格規定も論者によってさまざまである。

I. パーリンや井上達夫、矢島杜夫などによる性格規定を吟味してみると、それを単純に湛山にオーバーラップさせて考えることは難しいことがわかる。しかし、その厳密な性格規定はどうであれ、ミルの自由論は、自由に基本的価値を見出すという意味で西欧の伝統的一元論であることは言えるであろう。ミルが自由論を主張しつつ、進歩史観ないし文明史観の視点から英国による植民地統治を正当化したことにそれが如実に表れている。

（3）ミルと違って、中国の辛亥革命やロシア革命に温かいまなざしを向け、自由主義の観点から一貫して日本の植民地放棄を主張した湛山は、価値多元主義の視点から自由と個人主義の価値を主張したと考えることができる。そのリベラリズムは、国内的には「政治上経済上社会上及び思想道徳上における個人の行動に機会の均等を与えること（全集1「断固として自由主義の政策を執るべし」）を主張する者であり、20世紀前半の new liberalism 的な折衷主義的な寛容の側面が色濃く見られる。

また国際的には「我々の利益を根本とすれば自然相手の利益を図らねばならぬ、外国との関係ではあいまいな道徳家であってはならず徹底した功利主義者でなければならぬ」（全集1「先ず功利主義者たれ」）ことを説くものであり、ここにも多面的な価値を認めつつ個人主義を唱えるという寛容性が強い。言い換えるとそこには、いずれも等しい根源的価値を持つ諸個人や諸国家の目的や諸善（自由、公正、平等など）は通約不可能であり（共通の尺度で測ることはできず）、何らかの共通の価値を部分的に認めつつ共存するしかないとの認識（濱真一郎2008）がある。こうした価値多元主義には、湛山の自由論にミルによる「社会的進歩」のために自由の必要という意味での道具的価値論の傾向があることにも対応しているかもしれない。こうした価値多元主義に立つリベラリズムは「私の個人主義」（1914）における夏目漱石の個人主義論に通じるものがある。猪木武徳（2004）の言うところの漱石の価値多元主義に立つ個人主義の思想である。

（4）戦前期日本にける知識人のこうした価値多元主義に立つ個人主義・自由主義の思想は、日本の社会経済思想に、inclusiveness, sharing, collectiveness などのフレーバーを与えてきたと思われる。それは徹底した自我の実現と個人的自由に根源的価値を見出す西欧的個人主義の伝統とは明らかに異なる。日本的企業システムなどの日本の経済システムのルーツは、参加の自由と継承線の存続により特徴づけられる経営体としてのイエ制度の歴史などとともにこうした個人主義の思想的特性の歴史的展開にもかかわっている。